

都市に響く太鼓

今も昔も変わらない。大祭が家族と仲間を結ぶ

3年に一度の「多太神社秋季大祭」。10月27日、宮入に平野、東多田、矢間そして新田地区の太鼓台とだんじりが集結した。

平安時代までさかのぼる神社の由緒。大祭の起源は誰も知らない。親が子へ、子が孫へと引き継いできた。

かつての村は都市になり、多くの人が移り住んだ。それでも祭りは変わらない。父親は大鼓を担ぎ、母親はにぎり飯を結ぶ。子どもたちは親の背を見て旧習を学ぶ。

宮入の日、至る所で笑い声が響く。担ぎ手は仲間。住む者誰もが祭祀に加わる。よそ者の隔てはない。大祭が宮元の地域を結んでいる。

多太神社秋季大祭

普段はひっそりとたたずむ多太神社。地域の氏神を祭る。大祭当日、東多田・矢間・新田が能勢電鉄多田駅にたどり着くと、宮元の平野が出迎え、連なって神社へ向かう。日の入り後に宮入し、境内で祭祀を執り行う。

Tabutojinja
多太神社

平野2-20-21
能勢電鉄平野駅から徒歩約5分。多田駅から徒歩約11分。

Caption

1_宮元平野地区の担ぎ手。拍子に合わせて太鼓台を差し上げる 2_担ぎ手を鼓舞する太鼓。叩くのは12歳までの乗り子 3_多田駅前に山車4基が集まる。儀式の後、連なって神社へと向かう 4,5,6,8,9_東多田、矢間、新田地区の担ぎ手 7_山車の巡行が国道173号を規制する 10_親に担がれ氏神の元へ向かう乗り子たち。大祭中、地に足をつけることは許されない ※左下写真 祭祀の間に見る笑顔



獅子舞

東多田地区の祭事。獅子舞が神社の境内を暴れ回り、太鼓ばやしに合わせて人の頭をかむ。厄除けの舞に、親は子を差し出し、無病息災を祈願する。

にわか芝居

だんじりに用意された舞台上、小芝居を演じる。モチーフは狂言や地域の伝承。「忠臣蔵」や「石松三十石船道中」など、台本は新田地区の住民が毎年書き起こしている。